

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<教育研究報告> 公立幼稚園における特別支援園内 研修の実践記録 (2)

著者	藤枝 静暁, 森田 満理子, 新井 邦二郎
雑誌名	川口短大紀要
巻	26
ページ	167-177
発行年	2012-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000680/

公立幼稚園における 特別支援園内研修の実践記録（2）

藤枝 静暁 森田満理子 新井邦二郎

1. はじめに

数年前より、幼稚園や保育園といった保育現場において、臨床心理士、学校心理士、発達臨床心理士といった資格を持つカウンセラーと保育者の協働による保育の試みが始まっている。こうした役割を担うカウンセラーは保育カウンセラーとかキンダーカウンセラーと呼ばれているが、統一した名称は無い。

他の区市町村に先駆けて保育カウンセラーを導入したのが東京都日野市である。坂上（2011）は日野市の保育カウンセラーについて詳しい報告を行っている。それによると、日野市では平成16年度から市内の全ての公立・私立幼稚園に保育カウンセラーを配置し、彼らは月に一度担当する園に勤務する。保育カウンセラーの役割は、①保育時間中の子どもの観察、②保護者への個別相談、③保護者を対象とした講演会などの実施、④保育者とのカンファレンス、⑤地域の子育て支援の5つである。保育カウンセラーを導入したことで、保育者の子ども理解が深まる、理解に基づくかかわりの手だてが広がったといった成果が報告されている。

日野市のように保育現場にカウンセラーを導入する動きは他の自治体にも広まりつつある。その一つが東京都北区である。北区では平成23年度より、特別支援園内研修という名称で、区内の6つの公立幼稚園に1名ずつ臨床心理士を配置している。実施回数は年間5回である。その日は、臨床心理士が担当幼稚園を訪問し、午前中から降園時間まで子どもの観察および保育に参加し、その後、保育者とカンファレンスを行う。

第一筆者は昨年度から東京都北区立A幼稚園（以下、A園と略す）にて特別支援園内研修を担当しており、その活動を実践報告としてまとめた（藤枝・森田・新井，2011）。報告内容は北区の特別支援教育、A園の概要、筆者らのA園での活動の様子、観察した子どもの様子、保育者と第一筆者によるコンサルテーションの内容と意義について考察した。特にコンサルテーションについては、保育者の子ども理解や資質向上に役立っていることが明らかになった。また、保

育現場で活動することが初めてであった第一筆者にとっても、子どもを観察する力、子どもを見立てる力、自身の専門性を保育に生かす力の向上につながったことが報告されている。

北区の公立幼稚園では在園児の保育と保護者への支援に加えて、地域の未就園児とその保護者に対する子育て支援も行っている。A園ではこれを未就園児の会と呼んでいる。特別支援園内研修にも「次年度入園児の相談」という業務が含まれており、第一筆者は昨年度の未就園児の会にも参加し、そこでの子どもと保護者の様子を観察した。本稿では、藤枝・森田・新井（2011）では取り上げなかった未就園児の会に焦点をあて、昨年度の活動について実践報告を行う。

なお、A園での特別支援園内研修は現在進行形であることと個人情報保護といった倫理的な配慮に基づき、本稿の執筆についてA園の園長および副園長に許可を求め、承諾を得た。

2. 保育現場に求められている子育て支援機能について

近年、保育機関の役割が社会的に拡大し、専門職としての保育者の役割もより広く深くなってきている（堀，2011）。

文部科学省（2008）による「幼稚園教育要領解説」の「第3章 指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項」のなかに「子育ての支援」が謳われている。その具体例として、地域の子どもの成長、発達を促進する場としての役割、遊びを伝え、広げる場としての役割、保護者が子育ての喜びを共感する場としての役割、子育ての本来の在り方を啓発する場としての役割、子育ての悩みや経験を交流する場としての役割、地域の子育てネットワークづくりをする場としての役割などがあげられている。現在、全国の幼稚園において実際に行われている子育ての支援活動として、子育て相談の実施（現職教員、教職経験者、大学教員、カウンセラーなどによるもの）、子育てに関する情報の提供（子育て便りなど）、親子登園などの未就園児の保育活動、子育て井戸端会議などの保護者同士の交流の機会の企画などが紹介されている。

厚生労働省（2008）の「保育所保育指針解説書」においても「第6章 保護者に対する支援」のなかに「地域における子育て支援」が謳われている。支援の具体的中身としては、①子育て家庭への保育所機能の開放（施設及び設備の開放、体験保育等）、②子育て等に関する相談や援助の実施、③子育て家庭の交流の場の提供及び交流の促進、④地域の子育て支援に関する情報の提供があげられている。

すなわち、幼児教育の現場が新たな子育て支援への対応を求められるようになり、就園児だけでなく未就園児と家庭の支援の拠点としての役割が、一層強調されるようになってきたのである（大場，2010）。

3. A 園における未就園児の会の活動について

A 園では未就園児の会を月に 3 回から 4 回開催している。未就園児の会は 2 種類あり、「さくらクラブ」と「なかよし会」である。この 2 つは以下のように入会資格が異なる。

- ・さくらクラブ…満 3 歳の誕生日を迎えた子どもとその保護者
- ・なかよし会…北区内に在住している 0～4 歳までの子どもとその保護者

次年度、幼稚園に入園予定の親子はさくらクラブに参加していた。A 幼稚園はさくらクラブをプレスクールと位置づけており、未就園の子どもが幼稚園生活に円滑に移行するための重要な場と捉えている。第一筆者は「次年度入園児の相談」という役割に基づき、さくらクラブに参加した。

4. さくらクラブの活動環境について

さくらクラブを主として担当しているのは保育者 1 名であった。副園長やクラス担任をしている保育者もさくらクラブを見守っており、状況に応じて援助に入っていた。A 園の保育者の他に、絵本や紙芝居の読み聞かせ、素話などを行うボランティアも来ていた。

さくらクラブでの活動の流れを Table 1 に示した。このように、前半は子どもが主体的に遊ぶことができる時間帯であり、後半は保育者が子どもに働きかけながら遊びを展開していく時間帯となっていた。

Table 1 さくらクラブの活動の流れ

時間	未就園児の様子	参考：在園児の様子
10:00	親子で登園後、受付	園庭での活動
11:00	園庭での活動 (スクーター、砂場遊び、滑り台、ボール遊びなど)	(サッカー、砂場遊び、けんけんば、虫探し、鬼ごっこなど)
11:10	片づけと移動	片づけと移動
11:30	ホールでの活動 (読み聞かせをきく、簡単な製作をするなど)	各クラスでの活動
11:40	親子で降園	昼食準備

5. 平成 23 年度さくらクラブの利用状況について

(1) さくらクラブの実施日と各回の参加者数の結果

平成 23 年度におけるさくらクラブの実施日と各回の参加者数を Table 2 に示した。全部で 27

回実施し、延べ参加者数は252名、1回あたりの平均参加者数は9.33人であった。学期毎の参加状況は、1学期は計10回実施し、延べ参加者数は110名、1回あたりの平均参加者数は11人であった。2学期は計10回実施し、延べ参加者数は99名、1回あたりの平均参加者数は9.9人であった。3学期は計7回実施し、延べ参加者数は43名、1回あたりの平均参加者数は6.14人であった。

学期毎で延べ参加者数に差があるかを検討するために χ^2 検定をした結果、有意差が見られた($\chi^2(2)=30.74$, $p<.01$)。ライアンによる多重比較の結果、1学期と2学期のそれぞれの参加者数は3学期のそれよりも有意に多かった(どちらも $p<.01$)。1学期の参加者数と2学期の参加者数には有意差は無かった。年間を通じて比較した場合、3学期の参加者数が少なかった理由については、以下の3つが考えられる。

まず、1学期および2学期は3学期よりもそもそも開園日(登園日数)が多かった。その結果、3学期のさくらクラブの開設日は、1学期および2学期のそれと比べると少なくなった。したがって、3学期の参加者数が1学期と2学期のそれよりも少なかったのは妥当な結果とも言える。

次に、さくらクラブ担当の保育者によると、例年、入園願書の配布・受付の時期に参加者も多くなるとのこと

であった。入園願書の受付は、毎年10月の最初の水曜日、木曜日と決まっている。その後は、入園先が決まることもあり、少しずつ、参加者数は減少していく傾向になるとのことであった。

3つ目の要因としては、平成23年度の3学期は全国的にインフルエンザが流行したことがあげられる。A園も例外ではなく、インフルエンザが流行し、数日の間、学級閉鎖となった。当然、さくらクラブに参加する予定であったとしても、インフルエンザにかかり参加できなかった、または、インフルエンザへの予防として外出を控えた可能性もある。

(2) さくらクラブ参加登録者と出席状況

さくらクラブの利用登録した親子は全部で30組であった。個人情報保護のために30組の親子に対してA～ADまでの略名をつけ、各親子のさくらクラブへの出席日数をTable 3に示した。

Table 2 実施日と参加者数

		実施日		参加者数	
平成 23 年	1 学 期	4月	22日	11	
		5月	6日	8	
			13日	17	
			20日	15	
		6月	3日	11	
			10日	12	
	17日		7		
	24日		9		
	7月	1日	11		
		8日	9		
		9月	9日	15	
			16日	11	
30日			10		
2 学 期		10月	14日	13	
	21日	8			
	28日	9			
11月	4日	13			
	11日	8			
	25日	10			
平成 24 年	12月	9日	2		
		1月	13日	9	
			20日	2	
	27日		14		
	3 学 期	2月	3日	1	
			10日	6	
			17日	4	
			24日	7	
					計 27日 述べ 252名

Table 3 各親子のさくらクラブへの出席日数

通し番号	略名	出席日数	通し番号	略名	出席日数	通し番号	略名	出席日数
1	A	23日	11	K	4日	21	U	3日
2	B	27日	12	L	14日	22	V	3日
3	C	9日	13	M	6日	23	w	1日
4	D	9日	14	N	1日	24	X	13日
5	E	27日	15	O	2日	25	Y	1日
6	F	17日	16	P	18日	26	Z	4日
7	G	20日	17	Q	6日	27	AA	1日
8	H	21日	18	R	1日	28	AB	2日
9	I	11日	19	S	2日	29	AC	2日
10	J	17日	20	T	2日	30	AD	1日

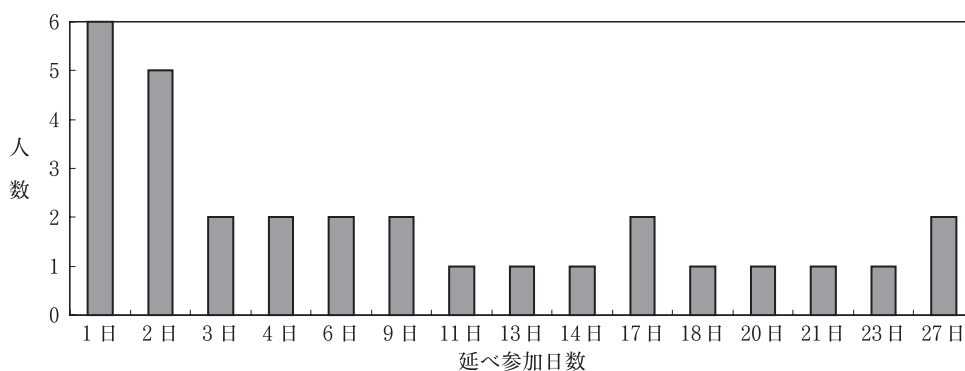


Fig. 1 出席日数毎の参加人数

また、さくらクラブに出席した日数ごとの参加人数を Fig.1 に示した。

出席日数の基礎統計値は平均値 8.93，標準偏差 8.57，最小値 1.00，最大値 27.00，中央値 5.00，最頻値 1.00 であった。さくらクラブへの平均出席日数は約 9 日，出席日数は 1 回のみから 27 回までと幅があった。最頻値の値から，さくらクラブへの出席は 1 回のみという親子が最も多かったと言える。第一筆者がさくらクラブを主として担当している保育者にこの理由について尋ねたところ，考え得る理由として以下の 3 点をあげた。

- 既に兄弟が A 幼稚園を卒園しており，保護者が A 幼稚園の様子をよく理解しており，保育者とも顔なじみになっているから。
- 下の子がまだ小さいので，さくらクラブと一緒に連れてくるのは大変だから。
- 上の子が小学生または中学生で，学校の行事などがあり参加が難しいから。

他方，最大値の 27 という値から，昨年度のさくらクラブに皆勤で参加した親子もいたことが分かった。皆勤の理由であるが，「さくらクラブに参加したい」という意志に加えて，その子ども兄弟が A 園に既に在籍しており，保護者が PTA 役員をしていたことから，来園する回数

が多くなったとのことであった。

6. 第一筆者によるさくらクラブにおける活動内容について

平成 23 年度の A 園における特別支援園内研修は 5 月 24 日（火曜日）、7 月 4 日（月曜日）、9 月 30 日（金曜日）、10 月 28 日（金曜日）、11 月 4 日（金曜日）の計 5 回であった。そのうち、9 月 30 日、10 月 28 日、11 月 4 日の 3 回がさくらクラブ開催日であった。第一筆者はこの 3 回のさくらクラブに参加し、出席した子どもの様子、親子のかかわりの様子を観察した。なお、Table 2 に示したように、各回のさくらクラブへの参加者は 9 月 30 日が 10 名、10 月 28 日は 9 名、11 月 4 日は 13 名であった。

(1) 子どもの観察

当日の朝、第一筆者とさくらクラブを担当する保育者で打ち合わせを行ってから観察を始めた。Table 1 に示したように、さくらクラブに参加する子どもたちはおおよそ 10 時前後に登園してくる。同時刻には、在園児は既に園庭で遊んでいた。さくらクラブに登園してきた子どもたちは、やや緊張しているような表情でしばし園児が遊んでいる様子を眺めていたが、やがて少しずつ遊びのなかに入っていく。さくらクラブの子どもたちは、在園児の遊びをよく見ており、同じように真似をして遊んでいた。在園児達もさくらクラブの子どもたちをごく自然に受け入れ、一緒に遊んでいた。

さくらクラブの子どもたちは、滑り台などの遊具を使った遊び、砂場遊び、サッカーボールをミニゴールに向けて繰り返し蹴る、A 園で飼育しているウサギ、ザリガニ、かめに興味を示し、触ろうとしたり、じっと眺めているなど多様な過ごし方をしていた。

第一筆者は砂場遊び場面に注目して観察した。なぜならば、砂場は一定の広さがあり、多人数の子どもが同時に遊ぶことができる場所だからである。また、砂遊びが子どもに満足をもたらすことは一般的に広く知られているからである（箕輪, 2007）。実際、砂場はさくらクラブに来た子ども同士の交流の場としてだけでなく、在園児とさくらクラブの子どもの交流の場としても機能していた。子どもたちは素手で団子を作ったり、スコップを使い山を作ったり、穴を掘りそこに水を入れたり、掘った穴をまた埋めたりを繰り返して遊んでいた。砂場遊びをしている子どもたちは手を真っ黒にして、額に汗をかき、さくらクラブの子どもと在園児の差が分からないほど夢中になって遊んでいた。子どもたちの姿を観察していると、砂に触れた時の感触の良さや水を加えることで形や色が容易に変形できるという砂の柔軟性の高さが、子どもの心を開放させ遊びに夢中にさせていたように思われた。

約1時間ほど外遊びをした後、保育者が子どもたちに「遊んだ物を片づけて、室内に移動する」ように声を掛けた。この活動の移行場面において、子どもの個性が見られた。すぐに片づけをする子ども、保育者の声が聞こえないかのように遊び続ける子ども、「もっと遊んでいたい」と自己主張する子どももいた。

ところで、片づけ場面では、率先して片づけをする在園児の姿を見て、さくらクラブの子どもも片づけ始める様子が見られた。つまり、さくらクラブの子どもに対して、在園児がモデルの役割を果たしていたのである。

保育室に移動した後は、保育者による絵本の読み聞かせ、簡単な製作活動などが行われた。ここでも、子どもによって参加の度合いに差があった、たとえば、読み聞かせの場面では、絵本の絵や物語に引き込まれるようにして聞き入っている子どもがいる一方で、絵本には興味を示さず他のことをしたり、室内を自由に歩き回ったり、走り回ったりしている子どももいた。後者には2通りの子どもの姿があった。一つは、絵本よりも他のおもちゃなどに興味を示し、それらで遊んでいる姿、もう一つは、身体のエネルギーがあふれ、じっとしてられないという姿であった。

（2）親子のかかわりの観察

さくらクラブに参加している保護者の様子、親子のかかわりも観察した。保護者のさくらクラブでの過ごし方も様々であった。子どもと一緒に遊びに加わる、子どもによく声を掛ける、特に声を掛けずに見守る、保護者同士で楽しそうに話している、心配そうに子どもの動きを常に目で追うなど様々であった。

保護者による子どもへのかかわり方で注目したのは、子どもが気分良く遊んでいる場面よりも、遊びが思い通りに行かず泣き出したり、外遊びの終了を告げられた時に子どもが片づけへと気持ちを切り替えられなかった場面である。子どもが気分を損ねた時の親の接し方を観察した結果、様々な対応が見られた。片づけに参加できるように促す、子どもの感情を落ち着かせるために、なだめるように声を掛ける、子どもの気持ちが早く切り替わるように「保育室に～があるよ」と誘う、ややきつい口調で叱るなど様々な対応があった。

（3）保育コンサルテーションについて

子どもが降園した後、保育コンサルテーションが行われた。副園長が保育コンサルテーションの司会進行を務めた。保育コンサルテーションでは次のような話題が取り上げられた。

- ① さくらクラブを担当している保育者が気になっている子どもまたは親子の様子を報告する
- ② 第一筆者が観察を通して気が付いたことを報告する

- ③ 来年度入園してくる予定のお子さんであれば、集団生活にスムーズに入れるように、今後の保育方針について話し合う

7. 実践のふり返り

第一筆者はさくらクラブに参加してみて、さくらクラブが地域の子育て支援という大きな役割を果たしていると感じた。具体的内容は以下の①～④の4点であった。また、さくらクラブにおいて第一筆者が果たしたと思われる役割についてもふり返る。

(1) さくらクラブが果たしている社会的役割について

① さくらクラブに対する地域住民からのニーズについて

Table 2 に示したように昨年度、さくらクラブは計 27 回実施され、参加者がゼロという日は無く、2月3日を除き常に複数の親子が参加していた。さくらクラブを通して、親子同士が交流したり、「(帰り際に) どちら方面?」と誘い合って帰ったり、「次も来る?」など声を掛けあう場面も見られた。つまり、近隣地域に住む親子のさくらクラブの利用に対するニーズは常にあり、そこに参加した親同士の交流の場になっていたと言える。すなわち、文部科学省(2008)による、幼稚園が家庭や地域社会との連携を深め、地域の実態や保護者及び地域の人々の要請などを踏まえ、地域における幼児期の教育のセンターとしてその施設や機能を開放し、積極的に子育てを支援していく必要があるという保育現場へのニーズに対して、さくらクラブはその役割を果たしていたと言える。

② 親子の安全な遊び場としての機能について

さくらクラブは幼稚園の園庭や園舎を開放し、かつ、複数の大人が見守る中で行われており、親子が安全に遊ぶことができる場としての機能を果たしていた。子どもの心身の健全な発達うえで、子どもが自由にのびのびと遊ぶことが不可欠である。それにもかかわらず、現代社会の課題の一つは、そういった場が少なくなっていることである。また、ごく最近では、子どもの連れ去り事件が続き、子どもを一人にすることの危険性が指摘されたばかりである。だからこそ、地域のなかに、さくらクラブのように親子が安心して遊ぶことができる場所があること自体が子育て支援の一つと言える。

③ 幼稚園の入園前後の円滑な接続機能について

さくらクラブに参加した親子は A 園の保育を一時体験したり、在園児の姿を間近に見ること

で、幼稚園生活をより具体的にイメージすることができたと思われる。特に第一子を養育している保護者にとっては、幼稚園選びや入園準備などは初めての体験であり、不安や緊張を感じている可能性が高い。しかし、さくらクラブに参加し、入園後のイメージができれば、それらは低減する可能性がある。子どもにとっても、全く知らない環境ではなく、さくらクラブで何度か来たことがある幼稚園に入園することによって、緊張感もそれほど高まらずに済み、また、新たな生活に早く慣れることができるだろう。

④ 保護者の子育て支援機能

大阪府私立幼稚園連盟（2011）の調査では、幼稚園に通う子どもを持つ母親の姿として、核家族かつ専業主婦という姿が最も多いと報告されている。大阪と同様に東京都においても近似した傾向と推測される。核家族かつ専業主婦の場合、子育てに関する悩みや相談したいことがあっても、いつでも誰かに相談できるとは限らない。

子どもと2人だけの孤独な育児環境に閉じ込められた状況が続くようになると、母親にとってはメンタルヘルスの面で、多くのリスク要因を抱え込むことになる（亀口、2010）。また、子育てに関わる時間が長くなるほど、自分の時間が持てない、社会から孤立しているなどの気分が強まるという指摘もある（吉田、2010）。

こうしたリスクに対しても、さくらクラブへ参加することが一つの解決策となりうる。子どもが保育に参加している間は、親と子が一時的に離れることができる。また、いわゆる「ママ友」ができて話し相手ができれば、孤立した状況から抜け出すことができる。さらに、お互いに子育ての気になることや悩みを話したり、あるいは、保育者に相談することもできる。さくらクラブを利用することで子育てに伴うストレスが緩和すれば、母親の気持ちにゆとりが生まれ、子どもへの接し方もより良いものとなるだろう。

(2) 第一筆者がさくらクラブで果たした役割について

さくらクラブに来ている子どものなかには、療育園に既に通っている子どももいた。その親子は次年度A園に入園することを希望していた。そこで、カンファレンスでは、さくらクラブで過ごす時間を安全でより豊かにすることに加えて、入園後の生活に早く馴染めることを視野に入れて、個別援助および保育方針について話し合った。具体的には、観察を通じて、場面が変わる時に気持ちの切り替えができるか、保育者が声を掛けた時に視線が合うか、どのような場面でこだわり行動が出現するかなどを把握することを狙いとしたりした。また、療育園と連携をとることを提案した。たとえば、こだわり行動が出た場合には、幼稚園と療育園の保育者が同じ対応をした方が子どもを混乱させずに済むからである。その他、保護者との連携、安全を確保するための保育

環境の設定などについても話し合った。

さくらクラブを担当する保育者のカンファレンスに対する感想は次のようなものであった。

特別支援の対象児（A とする）が、就園するに当たり、幼稚園では、療育機関との連携が必要と考えました。そこで、療育機関との連携する具体的な視点をいくつかご示唆いただきました。これらの中で、A の「こだわり」という視点をいただいたことで、園生活のなかでの「ルールへのこだわり」「数字へのこだわり」などを特別支援の柱とすることで、A が園生活に徐々に慣れていくことに役立ちました。

8. おわりに

最後に、さくらクラブに参加し、難しさを感じた点と今後の課題と思われる点について述べる。

さくらクラブでは未就園児を対象とした保育を行っていることが特徴であり、それゆえの独自の難しさがあった。在園児は毎日登園してくることが前提であるが、さくらクラブは自由参加を前提としているゆえに、計画的に継続して子どもとかわることが難しかった。たとえば、さくらクラブ担当の保育者が第一筆者に気になる子どもを観察して欲しいと依頼しても、当日、その子どもが来ないことがあった。つまり、子どもによっては「気になる」で留まり、保育や観察を通じてのアセスメントや支援にまで至らないこともあり得るのである。

次に、今後の課題について述べる。既述のように、さくらクラブには年間を通じて多くの親子が参加した。参加者が多くなれば、保育中の安全の確保が難しくなる。

少子化のなかで経営の合理化が求められる昨今では、公立私立を問わず保育者の数は減少傾向にある。A 園も例外ではなく、保育者の数に余裕があるわけではなく、在園児の保育と並行してさくらクラブを運営することは容易ではない。さくらクラブが果たしている社会的役割の重要性を踏まえると、今後もさくらクラブを継続していく必要があるし、その内容もより一層充実させていく必要がある。そのためには、今後、保育者の数の充実と資質の向上を視野に入れる必要があるだろう。

引用文献

- 藤枝静暁・森田満理子・新井邦二郎 2011 公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録 川口短期大学紀要, 25, 165-174.
- 堀科 2011 保育実践に生かすための「保育の心理学」へ——保育士養成の改正に伴って—— 新井邦二郎（監）藤枝静暁・安齊順子（編）保育者のたまごのための発達心理学 北樹出版 p.5.
- 亀口憲治 2010 子育ての新たな課題 子育て支援と心理臨床, vol.1 福村出版 10-12.
- 厚生労働省 2008 保育所保育指針解説書.

- 箕輪潤子 2007 砂場における山作り遊びの発達の検討 保育学研究, 45(1), 42-53.
- 文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説.
- 大場幸夫 2010 保育現場の子育て支援 — 保育相談の視点から 子育て支援と心理臨床, vol.1 福村出版 13-18.
- 大阪府私立幼稚園連盟 2011 キンダーカウンセリング集計年度比較表（平成16-22年度）.
- 坂上頼子 2011 報告 日野市保育カウンセラーの活動の実際 子育て支援と心理臨床, Vol.4 福村出版 54-58.
- 吉田弘道 2010 育児不安 — 親のメンタルヘルス1 — 子育て支援と心理臨床, Vol.1 福村出版 104-107.

（平成24年9月28日提出）